

# 宮城県のニホンザル

第 14 号

県北・色麻町に現れた  
謎のニホンザル集団の記録

平成 15 年 3 月  
宮城のサル調査会

# 県北・色麻町に現れた 謎のニホンザル集団の記録

## 目 次

宮城県北部・色麻町の市街地に突然現れた 由来不明のニホンザル集団を追う	…………… 1
	伊沢紘生 宇野壮春 藤田裕子
奥新川A群の現状	……………18
	清野紘典

# 宮城県北部・色麻町の市街地に突然現れた 由来不明のニホンザル集団を追う

宮城教育大学 伊沢 紘生  
宮城教育大学 宇野 壮春  
宮城教育大学 藤田 裕子

## 1. はじめに

2002年7月4日の早朝6時、宮城県北部・色麻町の、しかも市街地に突然ニホンザルの集団が現れた。色麻町には過去も現在も野生ニホンザルは全く生息していない。その集団は約40頭で、中にアカンボウ(2002年春生まれ)を腹にしがみつかせたり腰の上に乘せたオトナのメスが10頭ほどいるという(色麻町役場から県への連絡)。ということは、この集団は、群れから出たオスが一時的につくるオス・グループではけっしてない。明らかに独立した群れである。

この由来不明の群れは、7月4日以降、ほぼ南北に走るJR東北本線や東北自動車道などの幹線道路を次々に横断し(東北新幹線はトンネルの上を移動した)、行く先々で畑の農作物を採食しつつ、鳴瀬川の右岸沿いに西(脊梁山脈の方向)から東(太平洋の方向)にのびる丘陵地帯に依拠しながら、ひたすら東へと移動し続けた。

1982年以來ずっと続けてきた宮城県全域を対象にした野生ニホンザルの生態調査で、このような事態には一度も遭遇したことがない。一体何が起こっているのか。筆者らは7月11日に宮城県環境生活部自然保護課と調査等の打ち合わせをおこなった。そして、同自然保護課のバックアップのもと、群れが出没している自治体、とくに鹿島台町および松山町産業振興課の協力を得ながら、その日から現地調査を開始した。図1に調査した地域一帯、すなわちサルが移動した鳴瀬川右岸地域一帯の概略を示した。

以下は調査結果のまとめである。なお、この謎の群れに対し、調査開始後しばらく鳴瀬川の右岸に沿う形で東(鳴瀬川の下流方向)へ移動していたので、とりあえず「鳴瀬川右岸の群れ」(略して「鳴瀬右岸群」と呼んでい

たが、本報告でもその名称を踏襲する。

調査期間は7月11日から、群れが大移動を止め新たな遊動域を確立したあとの8月14日までで、実際に筆者らが現地調査をしたのは19日間である。

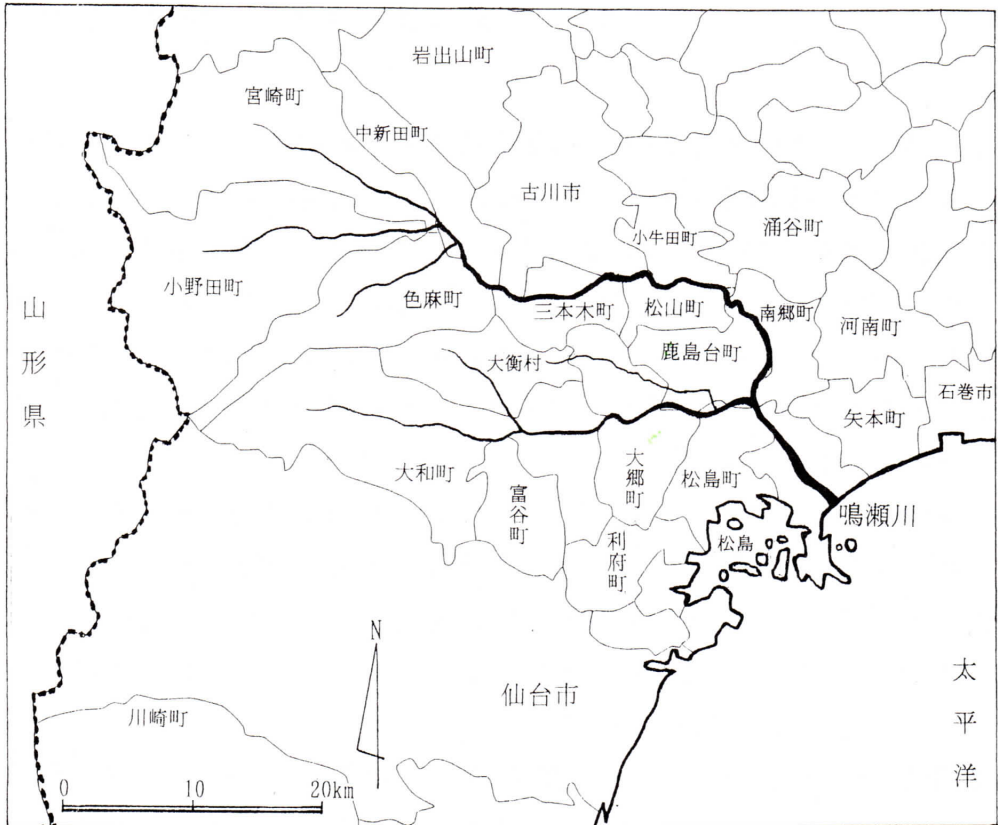


図1. 鳴瀬川右岸地域一帯の概略図

## 2. 鳴瀬川右岸の群れの頭数と社会構成

由来不明の群れが最初に目撃された7月4日以降の数日間、未知の場所を移動するという緊迫感や警戒心が群れのサルたちにはかなり支配的だったと思われるが、非常にコンパクトなまとまりを作って移動し、太い道路の横断や田んぼの畦道伝いの移動ではみごとな一列縦隊をなしていた(図2と図3)。したがって、頭数や性・年齢構成(社会構成)を調べるのは容易だったはずである。しかし、筆者らが調査を開始した7月11日以降は、まとまりがルーズになりつつあったこと、隣接するいくつかの畑へ群



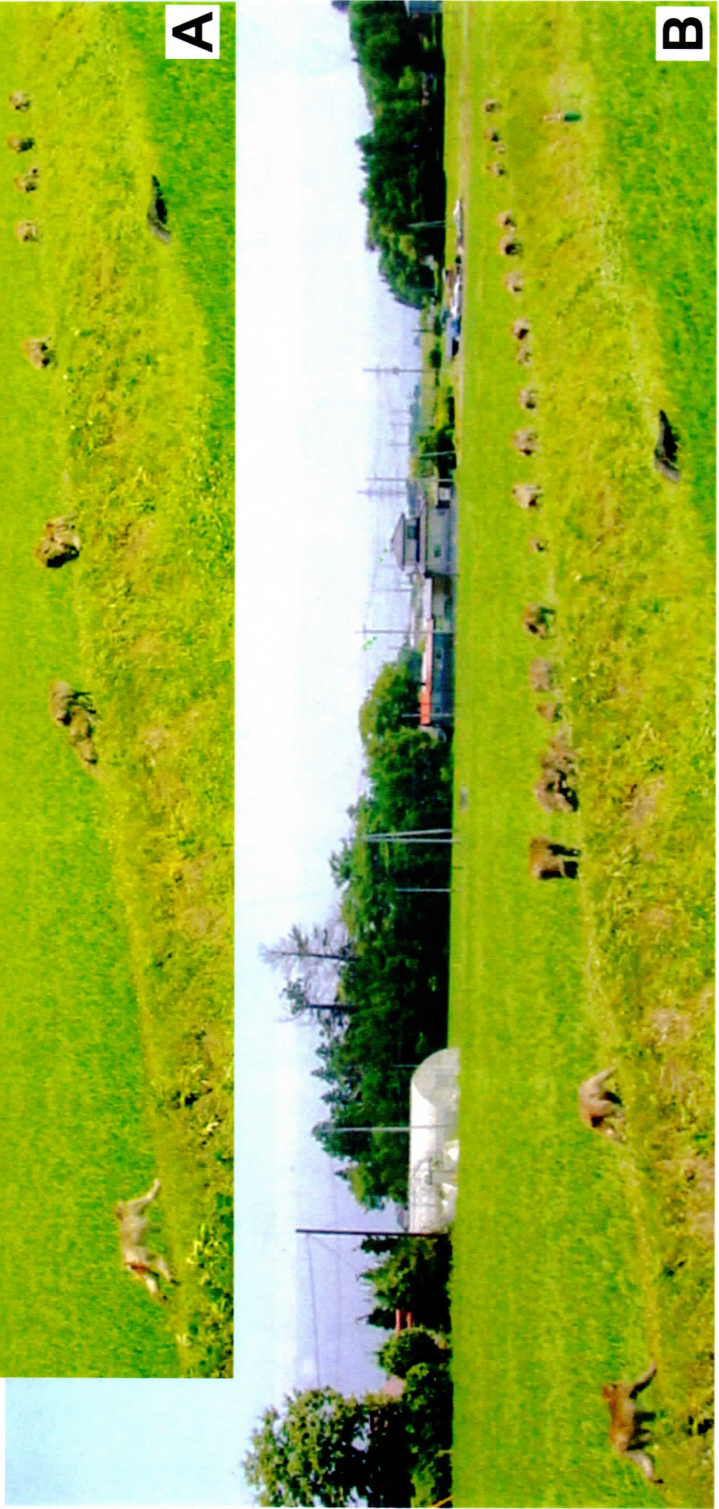


図2. 7月4日に色麻町の畦道を一列縦隊で移動する群れ  
(Aは行列の先頭部分、Bはそれを含む行列の大部分、いずれも山田栄男氏撮影)

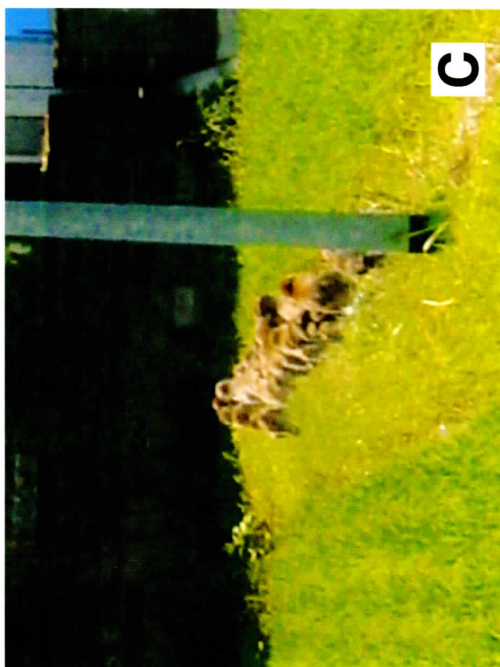
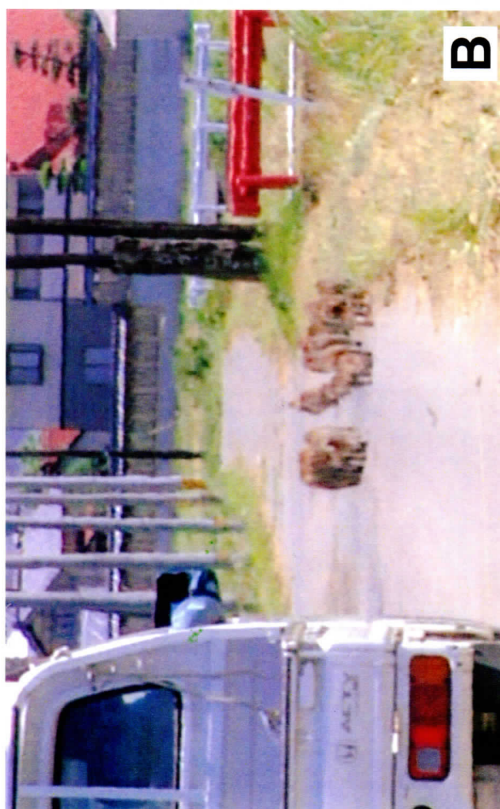


図3. 7月4日に色麻町内を移動する群れ  
 (Aは道路の横断、Bは道路を使った移動、Cは畦道の移動が建物でブロックされた時、いずれも山田栄男氏撮影)



れのサルたちが林縁部のやぶやスギの造林地に隠れながら分散して出没していたこと、その後も何回か幹線道路等を横断したが筆者らは残念ながらそこに居合わせることができなかつたことなどで、群れの全体像を一度に把握する機会には恵まれなかつた。

7月11日から8月14日までの、調査ごとに観察された性・年齢区分のそれぞれのうち、最大頭数をピックアップして整理すると計28頭になる。その構成を表1に示した。

表1. 鳴瀬川右岸の群れの構成

オトナ・オス	×3	(15歳前後, 12~13歳, 8~9歳)
オトナ・メス	×11	
ワカモノ・オス	×2	(5~7歳)
ワカモノ・メス	×3	(5~6歳)
コドモ・3歳	×1	
〃・2歳	×1	
〃・1歳	×1	
アカンボウ	×6	
計	28頭 + $\alpha$	

このほか、7月6日朝に三本木パーキングエリアの近くで東北自動車道を横断した際、上り車線でコドモが1頭自動車にはねられ死亡している(日本道路公団職員より県への連絡)。そのコドモは、大きさに関する情報から1歳ないし2歳と推定された。

一方で、この群れは7月4日と7月9日と9月26日の3回、ほぼ完璧と判断される行列等が観察されている。7月4日は早朝6時に色麻町西原地区に群れが突然現れた日だが、そのあと、群れが畦道伝いにほぼ一列になって東へ移動していくところが観察されている。数はアカンボウを腹にしがみつかせたり腰の上に乗せている10頭のサルを含め31頭(アカンボウを含めると41頭)だった(色麻町役場・山田栄男氏の観察。図2と図3を参照)。7月9日の観察は午後4時半で、群れは松山町次橋地区空屋敷の日吉神社近くを移動中だった。その時にアカンボウを含む40頭がカウ

ントされている(松山町役場からの連絡)。1頭少ないのは、コドモの自動車事故死によるのはまちがいない。9月26日の観察は以下の通りである。その日の朝7時頃、鹿島台町広長字蒜沢の酒井清晴氏宅前の水田畦道をサルが一列になって移動した。その時には独立して歩いているサルが21~23頭で、この中にはひときわ大きなサル(オトナのオスと思われる)が4頭いた。またオトナの背中に乗って移動している小さいサル(今春生まれのアカンボウ)が9~10頭いた(酒井清晴氏, 私信)。この観察より少し遅い時間だが、上記地点より直線で2キロメートルほど離れた鹿島台町と松山町の町境付近に10頭のサルが現われ、その集団は県道とJR東北本線を越えて鹿島台町船越地区の方へ向かった(松山町役場からの連絡)。10頭のうちアカンボウを持っているサルは1頭もいなかった。以上二つは明らかに違う集団であり、これら二つの、ほぼ同時観察の頭数を合わせるとアカンボウを含め40~43頭になる。数が7月4日や7月9日の観察より0~3頭多い可能性があるが、おそらくそれは、交尾期が近づき群れ外オスがどこからか現われ、群れに追隨していたのではないかと思われる。というのは、たとえば、鹿島台町では一昨年秋に小台の牛小屋にオトナのオス1頭が、昨年7月には新田のトウモロコシ畑にワカモノのオス1頭が出現したとの記録があるし(鹿島台町役場・志賀康英氏, 私信)、また上記二つの集団が観察された日より少し前の9月20日には、三本木町の街中で1頭だけで行動するオスが目撃されている(三本木町役場からの連絡)からである。

41頭の群れの構成については、7月4日に山田栄男氏が撮影した畦道を一列縦隊で移動していく写真(図2)から、かなりのところまで復元できる。図2のAが行列の先頭部分、図2のBがその先頭部分を含む後続のサルたちである。残念ながら行列の後尾の写真はないが、図2から1頭1頭のサルたちを判定すると、行列は表2のようになる。

また、この行列にはワカモノ・オス(Y♂)が1頭も含まれていないが、山田氏が撮影した別の写真に3頭写っているものがあり、表1にも2頭いるから、行列の後尾にはワカモノ・オスが少なくとも3頭いたことは確かである。同様にワカモノ・メス(Y♀)も3頭写っている写真があり、表1



にも3頭いるから、表2の行列に含まれている1頭のほか、少なくとも2頭はいたことになる。ほかにアカンボウ(B)をもったメス(A♀)がもう1頭いるわけだから、それに加えると、鳴瀬右岸群の構成は表3のようになる。

表2. 鳴瀬右岸群の行列 (矢印が群れの進行方向)

---

A ♀+B ← A ♂ ← J (1才) ← A ♀ ← A ♀+B ← A ♀+B ← A ♀+B
← A ♀+B ← J (2~3才) ← Y ♀ ← A ♀+B ← A ♀ ← J (1~2才)
← A ♂ ← A ♀+B ← J (3~4才) ← A ♀+B ← A ♀ ← J (1~2才)
← A ♂ ← A ♀+B ← A ♂

---

註) A:オトナ Y:ワカモノ(5~7歳)

J:コドモ(1~4歳) B:アカンボウ(0歳)

表3. 鳴瀬右岸群の構成 (復元)

---

オトナ・オス……………4	
オトナ・メス……………13	
ワカモノ・オス……………3	
ワカモノ・メス……………3	
コドモ {	3~4才……………1
	2~3才……………1
	1~2才……………1
	1才……………2
アカンボウ……………10	
不明……………3	

---

計 41 (うち1才のコドモ1頭は後に交通事故死)

そして不明の3頭だが、写真(図2)には写っていない行列の後尾のサルたちのうち5頭はワカモノのオスやメスであり、表3に示した構成ではオトナ・メスに比べてコドモの数が少なすぎるなどからすれば、ワカモノか3歳ないし4歳のサルである可能性が高い。

### 3. 群れの移動ルートと移動距離

#### 1) 7月4日から16日までの東進

謎の群れは、7月4日早朝に色麻町の市街地(西原地区)に突然姿を現して以来、7月16日までの13日間は、鳴瀬川の右岸、丘陵地帯(図4)の北側の裾野伝いに、ほぼ東に向かって移動し続けた。その大移動のルートを図5に示した。移動した距離に関しては、日ごとの確認地点を順に直線で結んでいき、直線ごとの距離を合計するという方法を用いた。所在が確認できなかった日の場合は、前日の最後の確認地点と翌日の最初の確認地点を直線で結んだ距離とした。結果は13日間で30.5キロメートル移動したことになる。しかし、群れが実際に動いた距離は、図5に示した直線的な移動ではなく日々小刻みに往きつ戻りつしたり迂回したりしていたわけだから、当然もっと長く、おそらく2倍前後にはなるはずである。

参考までに出発地点の色麻町西原と東進終点の鹿島台町小台を直線で結ぶと、その距離は26.4キロメートルになる。日ごとの平均移動距離(すなわち日ごとの平均移動スピード)は、上記のそれぞれの値を13で割ることで簡単に求められる。

#### 2) 7月17日から19日までの滞留

一級河川の鳴瀬川は、鳴瀬右岸群が7月16日に移動してきた鹿島台町小台地区では、流れの向きがすでに南へと変わっている(図4, 図5を参照)。右岸に沿って綿々と続いた丘陵もここで終わる。

鹿島台町小台で鳴瀬川本流にぶちあたった群れは、川の右岸に沿ったその先(南側)には水田があり吉田川が鳴瀬川に合流していて好適な丘陵地帯や林がないこと、川を渡った先(東側と北側)は広い平野で稲作地帯であること、稲はまだ稔りの時期を迎えていなかったこと、当時鳴瀬川はかなり増水していたこと、などが重なった結果と考えられるが、さらに東へ向かって鳴瀬川を渡河するような素振りは見せず、小台地区から丘陵の裾野を時計回りに4分の3周して、来たルートの阿久戸地区に出た。往きにこの地区に群れがいたのは7月15日の夕方から翌16日午前中にかけてである。この3日間の群れの動きを図6に示した。移動距離は東進の時と同じ計算で3日間で4.0キロメートルである。

### 3) 7月20日から7月28日までのUターン

鳴瀬右岸群が丘陵先端部に3日滞在したあと、鹿島台町阿久戸地区から、やって来た方向(西)へほぼ同じルートをたどって引き返し始めたのは7月20日である。そして7月28日には松山町伊場野地区および花ヶ崎地区まで戻った。往きの東進の時、この地区に群れがいたのは7月8日午後から夕方までである。ここまでの移動距離は同様の計算で12.2キロメートルになり、1日の平均移動距離はおよそ1.36キロメートルとなる。往きのそれは2.35キロメートルだから、行きよりかなり遅いスピードである。この間の移動ルートを図7に示した。

### 4) 7月29日以降の行動域の確立

筆者らは鳴瀬右岸群がこのまま行きとほぼ同じルートを通って西に向かって移動し続け、今まで棲んでいた地域へ戻るのではないかと予測し、かつ期待もした。もしそうならば、謎の群れの由来がはっきりするし、これまで全くサルがいなかった鹿島台町や松山町等で、突如発生したサルによる農作物被害は自然災害的な一過性のものとなり、今後特別な被害防除対策をとらなくて済むことになるからである。

しかし、この頃になると、メディアで鳴瀬右岸群のことが報道されたこともあって、報道関係者のほかカメラマンやサルを物珍しがる地元“モンキーウォッチャー”らの数が増えていった。住民が自分の畑をサルの被害から守れるよう自治体が有線放送等で群れの居場所をアナウンスしていたが、それもモンキーウォッチャーを増やす方に作用した。筆者らは、群れの行く手を阻むことで、元来の地域へ戻らずに丘陵部に居座ってしまうことを恐れ、できるだけスムーズに移動できるよう関係者に協力を依頼した。

ところで、7月28日に松山町下伊場野地区まで戻った群れは、翌29日と30日の2日間その一帯に留まった。理由としては、この一帯、次橋地区や後沢地区、下伊場野地区では丘陵地帯の奥深くまで田畑が設けられていて、サルにとって人間に気付かれず農作物を採食するのに好都合だったこと、下伊場野地区の田畑の西側(サルの進行方向)には民家が建ち並んでいたこと、そこにモンキーウォッチャーが頻繁に訪れていたことなどが重





図4. 群れが移動した鳴瀬川右岸の丘陵地帯  
(国土地理院発行の5万分の1地形図、「浦谷」と「松島」の縮小コピー)



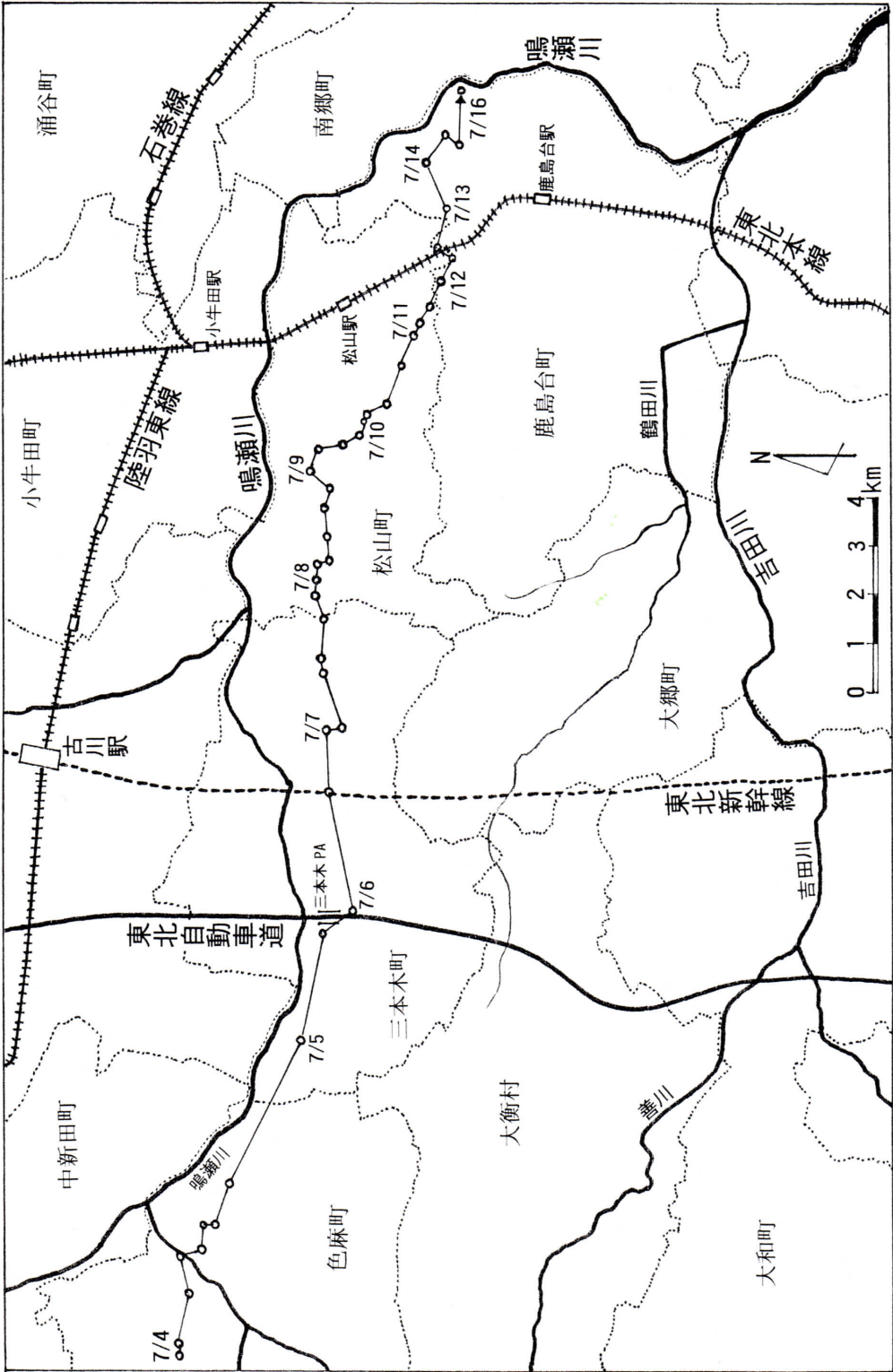


図5. 群れの大移動・東進 (図4とスケールを同じにしてある)

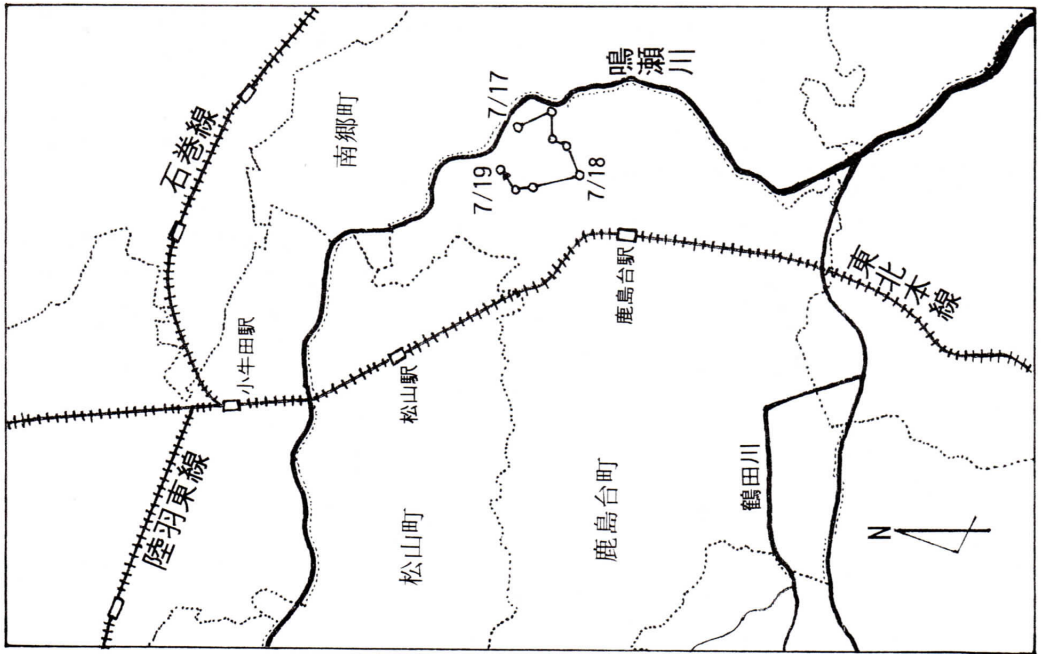


図6. 群れの滞留 (7/17-7/19)

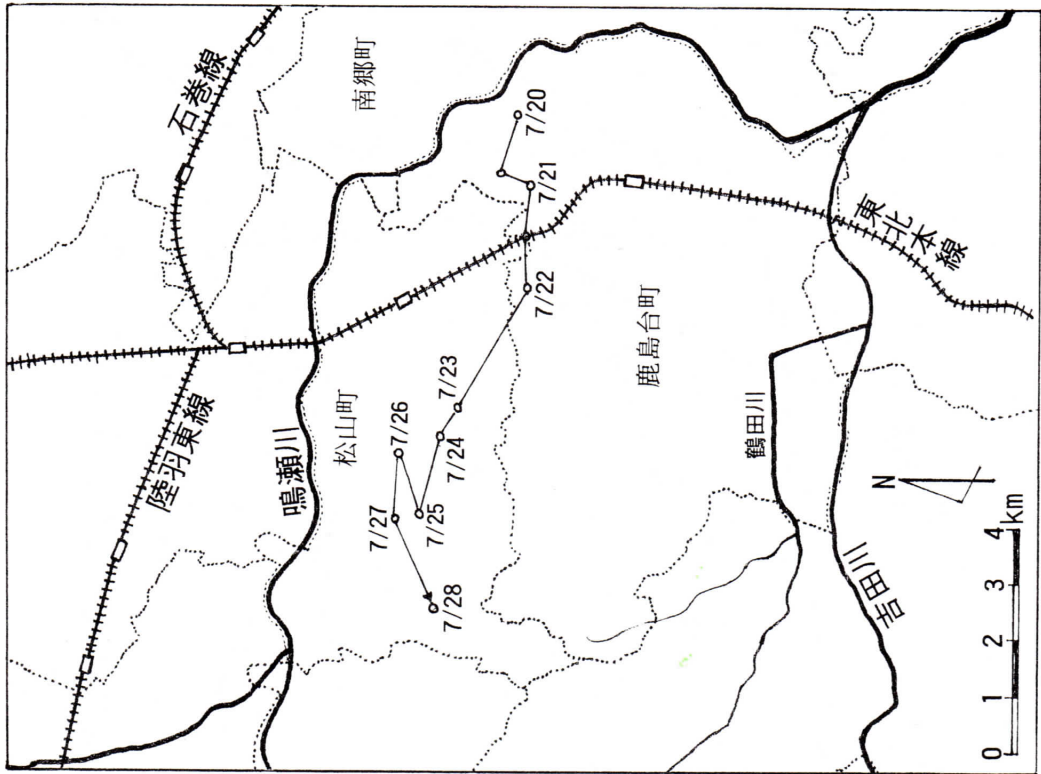


図7. 群れの大移動・西進 (7/20-7/28)

なったためと考えられる。その間、群れの数頭が民家脇から道路に出て横断したが、後続のサルたちが来ないので引き返したことが数回あった。また、当時群れが二つ、ないし三つに分派していた可能性もあり、これまでの、コンパクトなまとまりを作って一気に移動するという状況にはなかったことも理由の一つと考えられる。しかし、そのようなことが重ならなくても、さらに西に向かって移動し続けたかどうかはわからない。そこに留まったのは、群れの多くのサルたちにとって居心地の良い場所だったから、というごく単純な理由によるかもしれないからである。

以後、鳴瀬右岸群は西進を止め、松山町と鹿島台町にまたがる丘陵地帯に居座り続け、丘陵の南側裾野へも新たに移動して行き、やがて遊動域を確立するにいたる。7月29日から8月23日までの出沒地点を最外郭法で結んだ群れの遊動域を図8に示した。面積は24.9平方キロメートルである。この遊動域の西の境界線は実際にはもう少し西にふくらんでいるはずだが、畑がなく被害報告もなかったので詳細はわからない。

なお、8月23日に畑の農作物を求めて出沒した地点は鹿島台町に隣接する大郷町大松沢地区である。

#### 4. 鳴瀬川右岸の群れが田畑等で採食した農作物

群れの移動のところですでに述べたが、サルたちは移動しながら、畑があればそこに立ち寄って農作物をあさり、民家脇の果樹に実がなっていればそれをもぎ取って食べた。色麻町西原地区に出現してから、松山町および鹿島台町の丘陵地帯に遊動域を構え終える8月中旬までの期間にサルが採食していた農作物の種類を表4に、それ以降10月下旬までを表5に示した。観察時の印象からは、農作物に対するサルの好みには差があって、カボチャやトウモロコシ、ナガネギなどは優先的に食べられていたが、それでも、なんとか食べられる状態にまで成熟している農作物ならとりあえずなんでも手をつける、といった状態だった。例外はニラとコマツナである。なお、表4と表5にはサルの嗜好度も併せ示した。

鳴瀬右岸群が稔り始めた稲に手をつけた最初は8月30日、鹿島台町杵師前地区である。サルたちは林縁部の畦道伝いに手を伸ばし稲穂をしごき

取って悠々と採食した。

表 4. 鳴瀬右岸群が採食した  
農作物(五十音順)  
8月中旬まで

農作物	嗜好度	農作物	嗜好度
ウメ		トウモロコシ	◎
エダマメ	○	トマト	△
カブ	△	ナガネギ(大)	◎
カボチャ(実)	◎	ネギ(細)	△
カボチャ(花)	△	ナス	○
キュウリ	○	ニンジン	○
ササゲ	◎	ピワ	
ジャガイモ	△	ブロッコリー	△
スモモ		モモ	
ダイコン	○	ユリ(根)	○
タケノコ	△	リンゴ(未熟果)	
タマネギ	○		

表 5. 鳴瀬右岸群が採食した  
農作物(五十音順)  
8月末から10月下旬

農作物	嗜好度	農作物	嗜好度
イチジク	△	ダイズ	◎
エダマメ	○	トウモロコシ	◎
カキ		トマト	△
カボチャ	◎	ナガネギ	◎
クリ		ナス	◎
コメ	○	リンゴ	
スイカ	○		

註)サルの嗜好度を高い(強い)順から◎>○>△で示した。ただ、果物に対する嗜好度は果樹の本数や、やって来た時に熟れた状態の実がどの程度木についているか等にも依るので評価を差し控えたが、いずれも好んで食べた。

農作物以外にサルが採食していた自然の植物は、キイチゴやヤマグワの実、ユリやサンショウの花、道路脇や畦道のクローバーなどの草である。ただ、丘陵部に多いスギの造林地とそれを取り囲む雑木林のいずれでも、近年人手がほとんど入っていないため藪でふさがり、筆者らは群れの動きについて行けず、ごく断片的にしか把握できていない。おそらくこの時期、林の中でも多様な食物を口にしていたと思われるが、群れが一方では丘陵部をひたすら東へ向かいながらも、道中では自然の食物を求めてでなく、入り組んだ丘陵部の周縁域にある畑で農作物を優先的に求めていたことは間違いない。



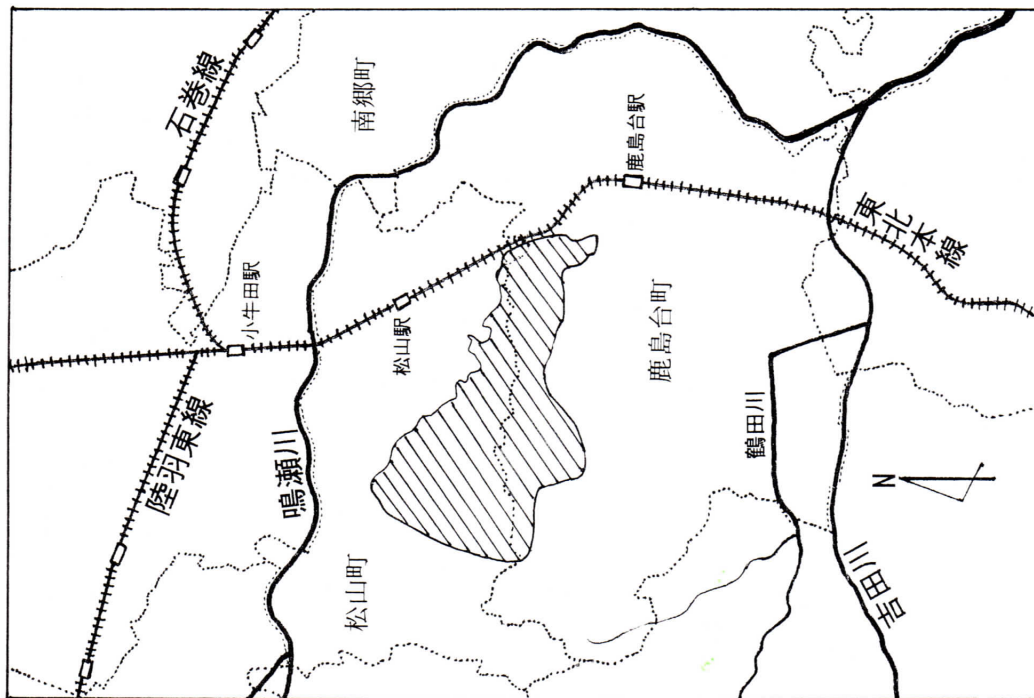


図9. 群れの行動域 (冬期)

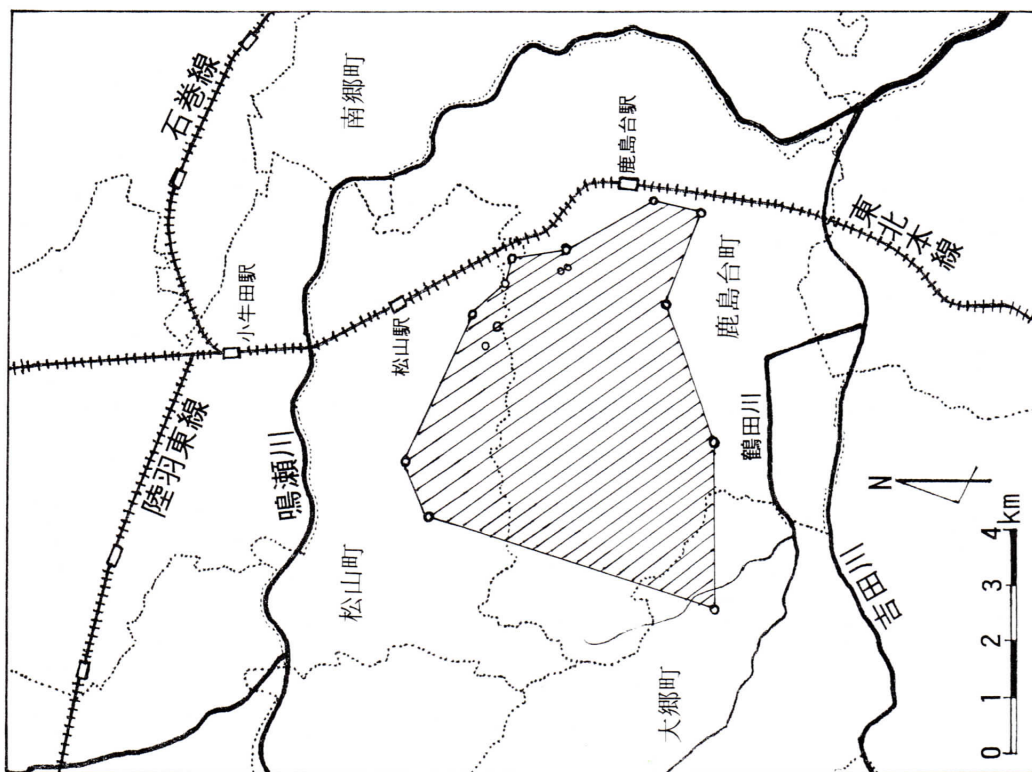


図8. 群れの行動域 (7/29-8/23)

## 5. 鳴瀬右岸群の半年後

秋が深まるにつれ農作物は徐々に収穫され、田畑から少なくなっていく。群れは丘陵地帯の落葉樹を中心とする二次林で、今年(2002年)良く稔ったドングリ(クヌギ、コナラ、ミズナラ、カシワ等の種子にあたる部分)やクリ、アケビなどを中心に採食していたためと思われるが、あまり鹿島台町や松山町の田畑に出没しなくなった。

やがて、両町では作付けした農作物の収穫がすべて終わり、雪が積もって、丘陵地帯の山裾でサルを目撃することはなくなった。群れは、丘陵部の奥深くにある牧場に出ては、雪の消えた南斜面で牧草を食べることが中心の生活へと変わった。雪の消えた道路ののり面や伐開地等ではイネ科の草やスゲ類を求めた。2003年1月10日の現地調査では、牧草地から牧草地へ向かうサルの足跡を、二ヶ所の雪上で発見した。雪上にプリントされた足跡はごく新しいもので、その日の午前中のものと思われた。残念ながら積雪がまだだったので、群れの全個体が雪上に足跡を残したわけではなかったが、一ヶ所では20頭分(アカンボウの足跡なし)、もう一ヶ所では33頭分(うちアカンボウの足跡6)の足跡がカウントされた。最初の場所は伐開地を挟んだ太い林道なので、アカンボウの多くが緊張して母親の腰に乗り、二回目の場所は両側から藪が迫っている幅のごく狭い林道なので、多くのアカンボウは自分で歩いていたことが、両方の観察においてアカンボウの足跡数が異なる要因の一つだと考えられる。これら足跡の数からは、鳴瀬右岸群がこの時点でもほぼ一つにまとまって行動していることが推定された。

田畑にサルが現れなくなって以降の、サルの目撃地点や諸種の情報を総合して割り出した鳴瀬右岸群の冬場の遊動域を図9に示した(原図は鹿島台町産業振興課・志賀康英氏による)。面積は10.9平方キロメートルである。サルがスキー場や牧場でシバや牧草を好んで食べることは各地で知られており、その脇には藪が発達し多様な食物をサルに保証する。そのようなことが、鳴瀬右岸群が図9に示した地域に固執し続けている大きな要因と思われる。ただ、1月20日に行った松山町と鹿島台町の境界域にある四つの牧場での聞き取り調査では、10月末頃に2回と、12月24日、1月

2日、1月3日に各1回、計5回しか群れの日撃情報はなかった。

なお、鳴瀬右岸群の由来についての考察は本誌次号(15号)で行う。

## 謝辞

本調査を実施するにあたっては、宮城県環境生活部自然保護課の小泉保氏、佐々木徹氏、齋藤勝正氏、三島直温氏、水摩見自氏から全面的な協力を得た。とくに三島氏は日々刻々のサルの情報を研究室へFAXで送り続けてくれた。現地での調査では鹿島台町産業振興課の五十嵐弘氏や志賀康英氏ほか職員の方々、松山町産業振興課の酒井保氏や遠藤忠一氏ほか職員の方々の協力を得た。とくに志賀氏は鹿島台町にサルの群れがいる時の現地調査のほとんどで現場に同行してくれ、地理に不案内な私たちを助けてくれた。色麻町役場や三本木町役場からも貴重な情報提供を受けた。とくに色麻町農林課の山田栄男氏からは貴重な写真資料の提供も受け、本誌への掲載にも快諾を得た。サルを珍しがり、サルに感情移入し、一方でサルを憎んで畑から追い払ったじつに多くの住民の方々からは、情報提供はもちろん、調査で庭先までずけずけ入っていく私たちに対し大変親切に接してくれた。実際の調査では宮城教育大学附属環境教育実践研究センターの相沢文典氏(修士課程・仙台市立片平小学校教諭)、清野紘典氏(学部生)の協力を得た。

以上の方々に、深甚なる感謝の意を表する次第である。

なお、10月以降の調査は宮城のサル調査会が宮城県環境生活部から委託された「平成14年度宮城県ニホンザル生息状況調査」の一環として実施された。本誌の発行もその委託費によった。



# 奥新川A群の現状

宮城教育大学 清野 紘典

## 1. はじめに

野生ニホンザルの群れ、奥新川A群(以下A群と呼ぶ)は、宮城県仙台市西部地域に生息し、南奥羽・飯豊南個体群(大井ほか, 1997)の一角を構成している。A群は仙台市内では最も市街地に近接して生息する群れである。この群れは1996年ないし1997年、母群「奥新川の群れ」が2つに分裂して誕生し、母群の分布域よりも東より行動圏を構えるようになった(宮城のサル調査会, 1999)。1999年3月まで宮城のサル調査会によって調査がされてきたが、本報告では、筆者が卒業研究により調査した2000年以降のA群の動向についてまとめる。

## 2. 行動圏

2002年におけるA群の群れ確認位置を最外郭で結んだものを行動圏として図1に示す。その面積は42km<sup>2</sup>であった。行動圏は、広瀬川・国道48号線が中心となるように東西に細長くのび、最西端はJR仙山線関山トンネル付近、最東端は、国道48号線熊ヶ根橋付近である。熊ヶ根地区・新川地区・作並地区のほとんど全てがA群の行動圏に含まれていた。A群が利用している行動圏内の土地の割合は、広葉樹林帯61%、スギ林とマツ林を含んだ植林地22%、農耕地8%、耕作放棄地5%、線路・道路3%、その他1%であった。

季節別毎に行動圏を分析したところ、春季に最も広く、春から夏まではコアエリア(利用する頻度の高い場所)が広い。つまり広い範囲を低い頻度で利用する。それに対して、秋季は行動圏が狭くなり秋から冬にかけては狭い範囲を繰り返し利用する。また、秋季はコアエリアがいくつかのスポット状に分離する。冬のコアエリアは広瀬川の両岸である。このように、A群は季節毎に行動圏及びコアエリアを拡大・縮小・移動させていることが明らかになった。



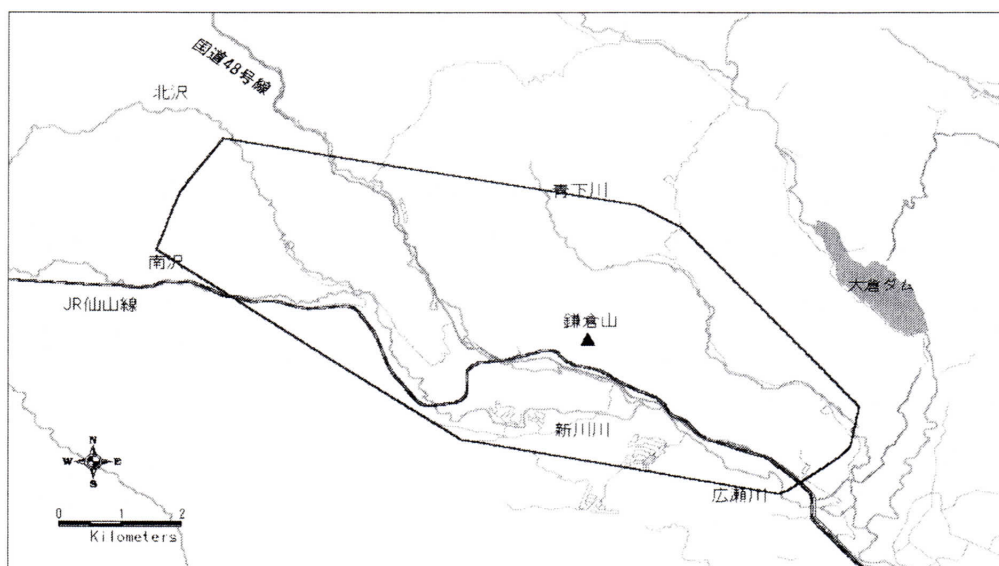


図 1. 2002 年 A 群の行動圏

### 3. 食性

春季、A群はササのシュートや草本類、フジの花などを採食するために奥山を利用し、人間の生活圏からは離れる。夏季は、クワの果実やクズの花を採食するため農耕地や人家などの林縁部を利用するようになる。8月からは夏野菜に被害を及ぼすようになり、以降、人間の生活圏に依存を強める。秋季に入るとクリの堅果やコナラの堅果などを採食しながらイネや冬野菜に被害を出す。冬は、コナラなどのドングリ類を主に採食し、積雪して林床が雪で隠れるとクワの樹皮や冬芽を採食する。

### 4. 農作物被害の現状

A群が分裂する前の母群である「奥新川の群れ」時代の昭和60年代から、旧宮城町(現仙台市西部地区)周辺では農作物への被害が報告されるようになり(伊沢ほか, 1986)、A群による農作物被害は現在まで続いている。平成10年から平成13年までの4年間で、A群行動圏内の被害金額は約4倍、被害面積は2倍以上に増えており、「猿害」として深刻な社会問題となっている(野生動物保護管理事務所, 2001)。これに対して仙台市は、平成11年に「仙台市西部地域ニホンザル保護管理検討部会」を設置し、平成12年仙台市西部地域ニホンザル保護管理計画方針を策定した。同年よりA群のサルに首輪発信機を装着し、被害調査、生態調査、被害対策などに取り組ん

でいる。

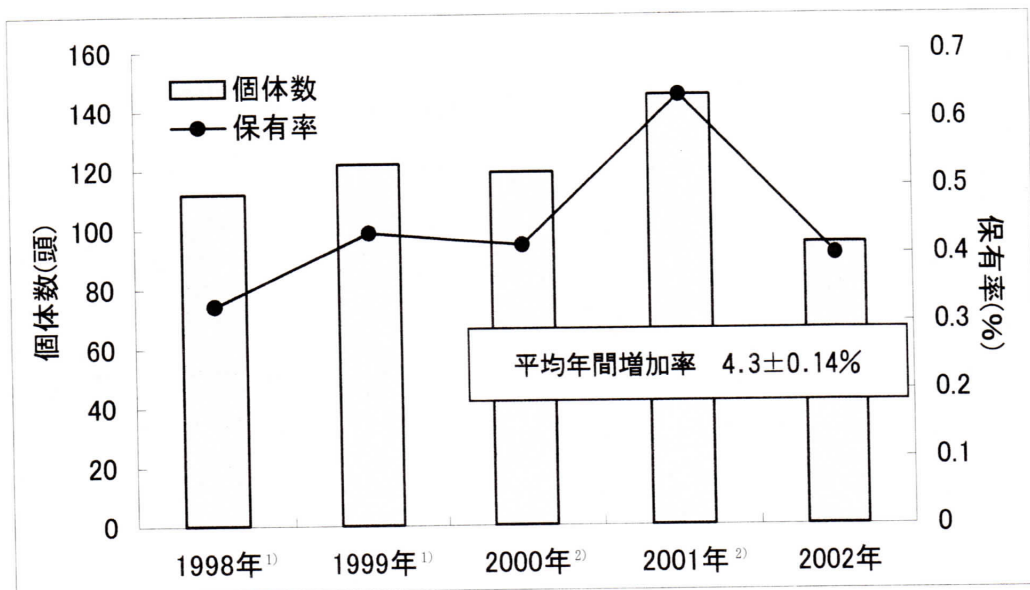
## 5. 個体数の変動

2000年1月から2002年12月までの個体数の推移を表1に示す。個体数のカウントは、群れが道路を横断する際に行った。2002年8月24日以前、少なくとも6月7日までは、A群の個体数は120頭前後を推移していた。なかでも2001年7月5日には、これまでに確認されたなかでもっとも個体数の多い145頭がカウントされている(野生動物保護管理事務所, 2001)。ところが、2002年8月24日以降のカウントでは、A群の個体数は100頭を越えることはなかった。これは、A群が2群に分裂したためだと考えられる。過去5年間のデータから計算すると、群れの平均年間増加率は $4.3 \pm 0.14\%$ (ただし2002年の個体数は分裂以前の6月7日のデータを用いて算出)であり、オトナメスがアカンボウを保有している割合(当歳児保有率)の平均は44%である(図2)。野生群としては高い当歳児保有率にもかかわらず、個体数の増加率が低いのは、交通事故による低年齢個体の死亡が関係している可能性がある(斉藤ほか, 2001)。

表1. 2000年から2002年までのカウント結果

※)野生動物保護管理事務所(2001)より引用

	2000	2001	2002					
	1/19*	7/3*	7/5*	8/16*	6/7	8/24	9/10	11/10
A♂	10	5	11	6	8	11	8	9
A♀	29	40	43	37	35	23	32	24
A-	0	0	0	0	0	0	0	0
Y♂	5	6	6	2	18	3	4	3
Y♀	7	9	8	8	7	9	3	11
Y-	0	0	0	0	0	4	7	7
J♂	9	0	11	7	10	1	2	1
J♀	8	0	1	13	1	5	0	0
J-	39	40	37	24	32	17	28	21
B	12	22	28	26	18	11	11	9
×	0	0	0	0	0	6	0	0
合計	119	122	145	123	129	90	95	85



註 1) 宮城のサル調査会(1999)より引用

2) 野生動物保護管理事務所(2001)より引用

図 2. 過去 5 年間の A 群の個体数変動と当歳児保有率の推移

## 6. 分裂

A 群は個体数が 100 頭を超える大きな群れで、かねてから分裂が懸念されていたが、2002 年 6 月下旬以降、電波発信機をつけたオトナメス 3 頭がそれぞれ距離をおいた 2 つの集団で行動することが観察されるようになった。2002 年 7 月 21 日に電波発信機をつけた個体 3 頭が合流したことを確認し、以降 3 頭は別れて行動することは観察されなかった。これらと断片的なカウントの結果などを考え合わせると、群れは 6 月 8 日から 7 月 21 日の間に、最終的に分裂したと推測される。分派行動が開始される前の 6 月 7 日の調査で 129 頭が数えられていたこと、その後の個体数が最大で 95 頭であることから 30~40 頭が群れから去ったと考えられる。消えたサルたちのその後の行方は不明である。しかし、A 群の分裂後、2002 年 11 月~12 月にかけて A 群の行動圏内で 2 回、20~30 頭の群れが観察されている。これが 2002 年 6~7 月に起きた A 群の分裂群であるという可能性は否定できない。また、奥新川 B 群を含む既存の隣接群なのか、全く別群であるのかも明らかではない。周辺の群れの分布状況も含めて、今後の調査で明らかにしていきたい。

## 謝辞

本報告にあたり、宮城教育大学齊藤千映美助教授に終始ご指導を頂いた。(株)野生動物保護管理事務所の森光由樹博士には、現地調査において調査技術や手法についてご指導頂いた。また同事務所の岡野美佐夫氏には、データの分析方法を教えて頂いた。仙台市農政事務所および仙台市宮城総合支所まちづくり推進課からは、多岐にわたるご支援を頂いた。宮城教育大学山猫研究室の諸氏には、多くの点で援助と協力を頂いた。最後に、宮城教育大学伊沢紘生教授には、研究に当たりさまざまなお助言を頂いた。本報告は、以上の方々をはじめとする皆様の多くの協力と支援を頂いた。ここに謹んで感謝する。

## 引用文献

伊沢紘生・遠藤純二(1986) アンケートによる分布と民俗.

宮城県のニホンザル, 1. 20pp.

宮城のサル調査会(1999) 仙台西部地域ニホンザル生態調査完了報告書. 65pp.

大井徹・森 治・足澤貞成・松岡史朗・揚妻直樹・中村民彦・遠藤純二・岩月広太郎・伊沢紘生(1997) 東北地方の野生ニホンザルの分布と保全の問題点. ワイルド・フォーラム, 3(1): 5-22.

齊藤千映美・森光由樹・清野紘典(2002) 仙台市西部地区における野生ニホンザル交通事故死の影響. 第18回日本霊長類学会大会予稿集, p. 56

野生動物保護管理事務所(2001) 平成13年度仙台市西部地域ニホンザル農作物被害対策調査報告書. 仙台市, 39pp.



宮城県のニホンザル 第14号

2003年3月15日発行

発行 宮城のサル調査会

編集 宮城教育大学

フィールドワーク合同研究室

仙台市青葉区荒巻字青葉

TEL/FAX 022-214-3515